

書道研究誌

書道の光



4

2024

Vol.668
宮城野書道会

清平調子三首

其二・三 李白

其二

一枝濃艷露凝香

一枝の濃艷露香を凝らす

雲雨巫山枉斷腸

雲雨巫山枉げて断腸

借問漢宮誰得似

借問す漢宮誰か似たるを得ん

可憐飛燕倚新粧

可憐の飛燕新粧に倚る



一枝のあでやかな牡丹の花に夜露がしつとりと宿り、香を凝らしたよう。これに比べると、雲となり雨となった巫山の神女の色香に悩んだ楚王は、いらぬ断腸の想いをしたものだ。ちよつとおたずねするが、別嬪ぞろいの漢の後宮で、だれが楊貴妃に比べられるだろう。

そう、かの可憐な飛燕がお化粧したばかりの美貌を誇る姿であろうか。

《雲雨巫山》楚王と巫山の神女と契った色恋の話。

《枉》むなしく。いたずらに。

《飛燕》漢の武帝の愛姫、趙飛燕。班婕妤を押しつけて皇后になった漢代随一の美女。

其三

名花傾国兩相歡 名花傾国 兩つながら相歡ぶ

長得君王帶笑看 長に得たり 君王の笑み帯びて看るを

解釋春風無限恨 解釋す 春風無限の恨みを

沈香亭北倚闌干 沈香亭北 欄干に倚る

名花の牡丹と傾国の美女とがどちらも互いによるこびあっている。いつもわが君は満足の笑みを浮かべてご覧になる。春風のもたらす尽きせぬ愁いがいまはすすきり解きほぐされ、沈香亭の北の欄干に寄りかかっておられる。

《名花》牡丹をさす。

《傾国》漢の武帝時代の名歌手李延年の歌にある故事で、国を傾けるほどの美女。

《君王》玄宗をさす。

《解釋》ときほぐす。

《沈香亭》南の内裏、竜池の東にあった建物。

今回は、前回と前々回にとりあげた、西施と王昭君とともに中国の三大美女の一人楊貴妃にまつわる詩です。

唐の開元年間になり宮中ではじめて木芍薬、つまり牡丹を植えて珍重されるようになります。そして玄宗のそばに侍るのは絶世の美女楊貴妃。この詞「清平調子」は宮中の沈香亭に植えた牡丹の宴席に呼び出された李白が献上した三首の連作です。今回はその中の二首を紹介します。

宮廷歌手として名声を得ていた李龜年は、この宴席で楽士を引き連れて歌い出したところ、玄宗は「名花と妃が御前に揃っているなかで、古い歌詞で歌うことはあるまい。」と当時翰林学士だった李白を呼び出して詞を作らせました。李白は二日酔いでしたが、花ときそう艶やかな楊貴妃の姿を目の当たりにし、筆をとるとたちどころに詠い上げたと言われます。李龜年はこの詞を楽士の演奏に合わせて歌い、玄宗は李白を高く評価するようになります。李白四十三歳、このことによって、宮廷詩人として詩名は高まり、一生のうちで最も華やかな時でした。

しかし、絶頂期も長くは続きません。高官たちは李白の名声を妬みだしました。詩中其二にある、楊貴妃を漢の成帝の愛妃趙飛燕になぞらえて書いたことが、李白の運命の分かれ道となりました。趙飛燕も有数の美女でしたが、身分の卑しい出自で自殺して亡くなっているため、宦官の高力士は、趙飛燕を楊貴妃にたとえることは、楊貴妃を賤しめるものだと讒言しました。李白はついに宮廷を追われます。結局三年たらずの宮仕えののち、放浪の旅にでることとなります。

また三首目の「傾国」はもちろん楊貴妃のことですが、「傾国の美女」という言葉は前漢の武帝時代にはマイナスのイメージではなく、李白が詞に詠んだときも玄宗と楊貴妃が共に喜んでいきます。その後には安史の乱になり楊貴妃が実際に国を滅ぼす一因となり、傾国の美女の印象が一変しました。李白の人生もこの後に暗雲がたちこめますが、当時スター歌手だった李龜年も安史の乱で地方回りをする身となります。以前に、杜甫が落花の季節に江南で李龜年に逢って詠った詩「江南にて李龜年に逢う」を紹介しました。この詩に登場するすべての人々が安楽な人生ではありませんでした。しかし李白だけは千数百年経た今でも名を残し、今後も偉大な詩人としての評価は不動のものでしょう。

参考文献…中国詩人選集「李白」(岩波書店)・巨大なる野放図「李白」(宇野直人著平凡社)

春城処として飛花ならざるは無し 寒食 東風御柳斜めなり 日暮れて漢宮より蠟燭を伝う 青烟は散じて五侯の家に入る

春城処として飛花ならざるは無し
寒食 東風御柳斜めなり
日暮れて漢宮より蠟燭を伝う
青烟は散じて五侯の家に入る

《大意》春の城内、至る処に花びらが飛び散る。寒食の日、宮殿のほとりの柳は春風にそよぐ。日が暮れると漢の宮殿から天子の賜る蠟燭の火が
伝えられるが、その青い煙は分散して五人の権臣の家に入ってしまう。(韓翃詩・寒食) ※寒食は冬至より百五日目を言う。清明節の前三日。

積善の家には必ず餘慶有り

積善之家 積善之家
必有餘慶 必有餘慶

《大意》善行を積んだ家には、後に必ずさいわいがある。

焚香 臥
瑶席

読み
香を焚きて瑶席ようせきに臥がす
(香を焚いて玉のたたみに横になる)

佐藤象雲書

王偏やや上に
旁は中心を整える

中心より右半を広く 火は扁平に広がる

左右の扱いは
縦画から少し離し
横画から起筆する

下部の巾が弱くならないよう

ねかす

偏横画右上がり
旁縦画を強く直立させる

一般部規定課題出品について
 ・規定課題は段級の区別なく、前頁掲載の五言句となります。
 ・初段以下の方に限り、前半二文字または後半三文字でも構いません。
 ・規定課題(楷書)の出品はひとり一点に限ります。

連月課題

王維詩

「藍田山の石門精舎」

(後半)

朝梵林未曙

朝梵 林 未だ曙けず

夜禪山更寂

夜禪 山 更に寂たり

道心及牧童

道心 牧童に及び

世事問樵客

世事 樵客に問ふ

暝宿長林下

暝に宿る 長林の下

焚香臥瑤席

香を焚きて 瑤席に臥す

澗芳襲人衣

澗芳 人衣を襲ひ

山月映石壁

山月 石壁に映ず

再尋畏迷誤

再び尋ぬるに迷誤を畏れたれば

明發更登歷

明發 更に登歴せん

笑謝桃源人

笑ひて謝す 桃源の人

花紅復來觀

花の紅なるとき 復た來りて觀はん

草書

行書

※成家・師範の随意作品出品は一点までです。

焚香臥
瑤席

焚香臥
瑤席

焚香臥
瑤席

次号課題

隸書

焚香臥
瑤席

潤芳鬢
人衣

焚香臥
瑤席

潤芳鬢
人衣

◇各体とも書風は自由です。特に上位者は古典などを参考に創意溢れる作品をご出品ください。

(両部とも本会所定の指定用紙を使用のこと)

支部	順位	氏名
<p>吉野川岸の山吹咲きにけり</p>		
<p>峰の桜は散りはてぬらむ</p>		

藤原家隆

和泉溪石先生書



佐藤象雲書

音

モウシシユクシ
コウヒンケンシヨウ

略解

呉の毛嬙、施は西施のことで共に姿やさしく美人だった二人のあでやかな笑みをたたえた美しさは見る人を恍惚とさせる

微臣属書

微臣書を（東観）に属し

微臣属書

■ 虞世南・孔子廟堂碑

（初唐・西暦六二九年頃）の臨書

(2)

象雲臨

『微臣属書』

今月から始まった「古典を作品に活かす」では、欧陽詢と虞世南を取り上げましたが、初唐の三大家のもうひとり、欧陽詢の一つ年上の虞世南です。虞世南の現在まで伝わる作品で真筆と言われるものは、ほかの二人の多くの作品が残るのに比べて非常に少ないのですが、この孔子廟堂碑の石碑のみでも中国書道史に楷書の大家として名を遺すのにふさわしい作品です。

虞世南の書（虞書）は王羲之の五男王徽之の七世孫と言われる智永に学び、王羲之以来の正統を伝える継承者であったことが判ります。虞書は欧陽詢とその優劣を比較されることが多く、張懷瓘の「書断」では、「整っている姿という点では欧書に及ばないが、親しんでその内部に入っていくと隙がなく巧みなことに圧倒される。」と述べています。そして「虞は則ち内に剛柔を含む。欧は則ち外に筋骨を露わす。」とその違いを端的に表現しています。

今月は「微臣属書」の四文字です。穏やかな起収筆の線に留意して臨書してください。

導將來之器識

■孫過庭・書譜（初唐・西曆六八七年）の臨書

(58)

将来の器識きしを導導ぎ……

象雲臨

導將來之器識

『導將來之器識』

「将来の器識」とは、後進の才能見識ある人々のことで、孫過庭は先達のすぐれた規範を世に広めて、これから伸びてゆく才能のある人を導いていきたいと述べています。「導」の下部は「木」の草書体で書かれています。

書譜の線は、肥瘦の変化を巧く使い分けていて、これは筆先の側直の変化と筆圧の強弱が多彩であることを物語っています。今月の「導」は筆先を利かして細やかな転折を繰り返して、さらに内部の空間もきちんと確保されています。続く「將」は偏から旁に向かう斜線は側筆気味に筆を使い太くして、終筆は筆を立て直筆で小さく円転させています。「來」以降の四文字は動きを抑えた自然な結体です。墨量が次第に少なくなり、最後の「識」は渴筆ですが、筆圧が強く紙に筆がよく食い込んでいることが判ります。